

2025年度 修士学位請求論文要旨

高等学校の「総合的な探究の時間」における

Arts-based research (ABR) を方法論としたメタファー探究の実践

—かかわりのなかで立ち現れる、自己の経験の意味生成に着目して—

国際日本学研究科 国際日本学専攻
多文化共生・異文化間教育研究領域
4911243001

羽佐間香子

本研究は、高等学校の「総合的な探究の時間」において、自己の経験をテーマとしてメタファーを用いた探究を実施することで、生徒がどのような知の生成のプロセスを経験したのかを明らかにすることを目的とする。VUCAと呼ばれる不確実で複雑な現代社会において、知識は固定的なものではなく、人や社会とのかかわりのなかで構成されるものとして捉えられるようになった。このような知の捉え方の変化に呼応し、教育においては、社会とのかかわりのなかで主体的に問題を解決し、新たな価値を生み出す力の育成が求められている。こうした背景から、生徒が主体的に知を生み出すことを中心に据える探究学習が注目され、日本では平成30年度の高等学校学習指導要領改訂により「総合的な探究の時間」が設置された。しかし、「総合的な探究の時間」における実践の多くは実証的な探究方法に収束しており、その方法に適合しない問いは扱われにくい状況にある。その結果、生徒たちは、自身の興味関心に基づく問いを立てたとしても、方法論との整合性を保つために問いを変更せざるを得ない。筆者はこの点に問題意識を持ち、実証的な方法とは異なる探究の方法論をひらく必要性を感じた。そこで本研究では、Arts-based research (ABR) を方法論として導入し、実証的な知の導出とは異なる「関係的な知の生成」のあり方とその探究プロセスを明らかにすることを目的とした。

第1章では、本研究の理論的背景を整理した。第1節では、「総合的な探究の時間」の制度的背景と概要を整理し、1999年の「総合的な学習の時間」から2018年の学習指導要領改訂に至るまでの変遷を確認した。第2節では、「総合的な探究の時間」に関する先行研究14件を対象に、実践が暗黙的に前提としている知識観の観点から分析を行った。その結果、多くの実践が知識を主体から独立した事実として捉える「客観主義的な知」を前提としていることが明らかになった。しかし、人や社会をテーマとした探究において、それらは個人や社会的文脈と分離して考え難いものであるため（笠原 2022）、主体と対象のかかわりのなかで意味が構成される「構成主義的な知」の捉え方が不可欠である。そこで本研究では、知を人・モノ・環境のかかわりのなかから生成されるものとして再定義し、これを「関係的な知の生成」と位置づけた。第3節では、人や社会を対象とした「関係的な知の生成」を可能とする方法論として、ABRの有効性を示した。ABRは、あらかじめ設定された問いを検証するのではなく、アートの制作と省察を通して問いを見出し、新たな知を生成することを目指すアプローチであり、個人の経験と社会的文脈を接続しながら知を生成する特徴を持つ（笠原2022；笠原2024；リーヴィー 2025）。第4節では、高等学校における「関係的な知の生成」の具体的な方法として、自己の経験をテーマとしたメタファーを用いた探究を提示した。探究のテーマとして自己の経験を扱う理由として、高校生が自己と深く結びつく探究課題を見出すことに困難を感じている点が挙げられる（水谷・寺田 2022）。また、探究の手法としてメタファーを採用する理由は次の3点である。第一に、メタファーは、断片的な要素の間をつなげてそのかかわりから知を立ち上げる性質を持つ（ガーバー・コフマン2024）。第二に、抽象的で言語化しづらい自己の経験を知覚可能なものへと変換し（レイコフ・ジョンソン 1980）、自己・他者・社会・アートのあいだに多様なかかわりを生み出す可能性がある。第三に、メタファーは意味を暗黙的に提示する表現形式であり、経験や感情の複雑性を保持したまま想像力を喚起し（Moon 2007）、自己の経験や社会的文脈の断片を結び直すことで新たな意味生成を促す点において有効である。

第2章では、本研究の目的と意義を述べた。本研究の目的は、高等学校の総合的な探究の時間において、メタファーを用いた自己の経験の探究を実践し、高校生がどのような「関係的な知の生成」を経験したのかを明らかにすることである。研究の問いとして、(1) メタファーの生成プロセスにおいて知がどのように生成され、どのような特徴を持つのか、(2) メタファーを介した対話のプロセスにおいて知がどのように再構築され、どのような特徴を持つのかの2点が設定された。本研究の実践的意義は、個人や社会をテーマとする探究において「関係的な知の生成」というアプローチを提示し、総合的な探究の時間における探究のあり方に新たな視座を与える点にある。また、学術的意義は、研究者や高等教育での事例が多いABRを中等教育で実践することにより、ABRの理論的・方法論的発展に寄与する点である。

第3章では、本実践の概要を詳述した。研究協力者は、大阪府にある私立X高等学校の進学コースに在籍する高校1年生と担任教員であり、2024年度は1クラス22名を対象に全10回、2025年度は2クラス67名を対象に全6回のABR探究が実施された。実践内容は担任教員との協議により決定され、複数のアート手法を用いた探究活動が行われた。筆者は観察者および実践者として授業に関与した。

第4章では、2024年度のメタファー探究の概要と、分析の手続きならびにその結果を示した。実践では、「中学生時代の自分」と「高校生活における理想の自己像」をテーマに、身近な具体物を用いて自己をメタファーとして表現し、ペアでの対話を通してその語りを物語化した。分析は、研究の問い(1)を明らかにすることを目的とした。分析データとして、生徒が生成したメタファー、活動後の振り返り、自由記述式アンケートを収集し、ナラティブ分析と質的分析を併用して検討した。その結果、中学生時代の自分を表すメタファーの機能として、【感情や体験の外在化】【自己イメージの再構築】【他者とのかわりに位置づけられた自己の認識】【学びや成長のプロセスの可視化】の4点が明らかになった。また、高校生活における理想の自己像を表すメタファーの機能として、【理想の自己像の構築】【身につけたい知識や能力の展望】【意識や行動の変容】【充実した高校生活の志向】の4点が示された。さらに、一部の生徒は、2つのメタファーを結びつけ、自己の物語を構成していた。

第5章では、2025年度のメタファー探究について、実践の概要、分析の手続き、分析の結果を示した。実践は、高校生活の4・5月の経験をテーマに、生徒が具体物を用いて自己の経験をメタファーとして表現し、それを媒介にペアで対話を行った。分析では、研究の問い(1)(2)を明らかにすることを目的とした。データとしては、生徒が生成したメタファー表現とその説明文、および実践中のフィールドノートを収集した。分析は、ナラティブ分析と質的分析を併用し、メタファーの生成段階と、対話を通じた再構築段階の2段階で行った。分析の結果、メタファーの生成段階では、【自己の感情・感覚の具体化】【自己の在り方の再認識】【将来の理想像の構築】【他者・環境との関係における自己の知覚】【自己を取り巻く環境に対する理解の再構成】【これからの高校生活の想像】【4・5月の高校生活における気づきの具現化】の7つの機能が明らかになった。また、一部のメタファーは、自己の経験を多面的・多層的に捉えるものであった。対話を通じた再構築段階では、【明示されたナラティブ】【無意識下のナラティブ】【他者により想像されたイメージ】を起点として対話が展開され、【ナラティブの具体化】【意味理解の深化】【ミクロからマクロへの拡張】【時間軸への接続】といったはたらきが確認された。

第6章では、メタファー探究における生徒の「関係的な知の生成」を、デューイの探究と芸術の理論に基づいて考察した。第1節では、メタファー創作を通して生成される「ひとつの経験」に着目し、それが「物的素材」と「内部の心的要素」の相互作用、自己と社会的文脈の関係、過去・現在・未来という時間軸のなかで成立していたことを示した。また、「ひとつの経験」を秩序づけ意味づけようとする「衝動性」が働く起点と帰結点は生徒ごとに異なり、知の生成が個々の経験史との関係のなかで立ち上がることが明らかになった。第2節では、自己の経験がメタファーとして表出され、他者との対話を通して意味が深化・拡張していく過程を検討した。メタファーは個人の内部で再構築された経験を可視化し、他者との相互作用を可能にする媒介として機能しており、他者との対話によって新たな知が立ち現れていた。第3節では、メタファーが顕在化させる知の側面と、暗示的に保持する知の側面を検討した。メタファーは言語化しづらい経験の質的側面を可視化しつつ、多面的・多層的な意味を保持することで、他者とのかかわりのなかで新たな意味生成を可能にしていた。

最後に、第7章では本研究の課題と展望を提示した。1点目として、メタファー探究で生成された知が、その後のX高校における研究活動の問いにどのように接続していったのかを検証することの必要性を述べた。2点目に、メタファー探究で働いた思考が、他のアート形式を用いたABR探究にどのように活かされたのかを分析することを挙げた。3点目に、ABR探究を支える学習環境に着目し、教員による制度設計や生徒間の規範・関係性といった要素が、探究の様相にどのような影響を与えているのかについての検討事項として示した。